

みやこ の 近代

高階 絵里加

71

③ 革新の日本絵画と栖鳳

竹内栖鳳が、そのヨーロッパ外遊(明治三十三年—三十四年)以前に西洋近代美術の理念と出会った時期は、明治十九(一八八六)年六月のフェノロサ上洛時にごかのぼる。祇園中村楼で「京都の画工たちへ」と題して行われた演説会は、『日出新聞』にその内容が掲載された。その大意としては、「現在の日本画家は昔からの画法をいたずらに墨守するばかりで、何か実際にものを見て感動したところを描くという(こと)をしていない。京都はせつかく風光明媚な土地であるのに、皆同じような描き方から脱することが出来ないでいる。

これからは古い描き方や流儀にとらわれる(こと)なく、なるべく東京と連携しながら新機軸を出し、進歩してゆくべきである(こと)とであった。このとき幸野稔嶺の弟子であった栖鳳は二十三歳、「当時復興という(こと)がしきりに唱導されたために、かえって西欧の優秀な美術の存在に一倍の憧れを覚えた」と回想している。

日本画の諸流派のなかでもとりわけ「実際にものを見て」描く(こと)を重んじる四条派の流れを汲む栖鳳であったが、青年芸術家の鋭敏な感性は、まだ見ぬ西洋の絵画には異なる形の写実が存在

新鮮な感動こそ創造の出発点

しづかにそれは「感動」すなわち描く者の心の動きを重要な契機としていふ、という(こと)に気づいたのであった。

「画家がもし新鮮な刺激を得て、感奮を感じたときは、遠慮なくそれを作品に盛り立てるがいいと思う。それを握りつぶすと却って絵心を腐らせ(てしまふ)」と語る栖鳳にとつては、動物であれ風景であれ、ある対象を前にしたときの新鮮な感動があった。いっぽう東京において、フランスから明

るい色彩の洋画を持ち来たった黒田清輝も、「ま(づ)景色を見て起る感じを(描く)ことが肝心である」と言っている。黒田にとつてはこの「感じ」を描いた代表的な画家は、ローやミレーであった。また、明治二十年代後半から黒田とともに東京美術学校において日本絵画の革新を目指した岡倉天心も、「仏人ミレー、ローの如きは写実より写意を主唱す。実物より面白みを添ゆべしとなり」と、その「泰西美術史」講義において述べてい

る。そして栖鳳自身も、近代の画家の中でとくにコロロとミレーの名前を挙げて、「重き絵具を用ひて淡雅なる用筆と渋みある色つかいて…意簡にして情充ち溢れむ斗りて光線の用い様も緩和であつた」と高く評価しているのである。

日本の近代絵画は、十(八)世紀以来、西洋からま(づ)何よりも「写実」の精神と技法とを学び、吸収してきたが、十九世紀後半に新しい自然の見方を追究したフランス近代の画家たちに、東洋絵画の

「写意」の伝統にも通じ(る)ような表現を見いだしたのが、栖鳳や黒田や天心であった。とりわけ栖鳳は、自然の写実を基礎とする点においては古今東西同じであり、日本画家は大いに洋画を学ぶべきである、と日本画革新のために洋画の研究を勧め、あくまで日本画家としての立場から、西洋に何を学ぶべきかを冷静に見きわめていたといえる(であろう)。

(京都大学助教授・近代美術史)



青年期の栖鳳。30歳、明治27(1894)年ごろ(京都新聞社発行『栖鳳・松園 本画と下絵展』図録より)